脱構築研究会ワークショップ「ラディカル無神論以後の現代思想」

マーティン・ヘグルンド『ラディカル無神論』第1・3章の紹介と論評

島田貴史（東京大学）

判例：丸括弧内のアラビア数字は本書のページ数を示し、その他の文献は注に記した。下線はすべて発表者による強調であり、原文に付された強調は傍点によって記した。

本発表ではまず、(1) ヘグルンドの時間概念に焦点を当てて彼のラディカル無神論の要諦を確認したのち、(2) 今度は彼の議論をデリダと対比する形で位置づけ直す。両者の差異は、(i) 前未来形ないし未来完了時制と、(ii) 仮言的言辞という二つの論点に即して示される。ヘグルンドがデリダの特定のテクストや議論を扱えていない事態は、彼のラディカル無神論の構造から帰結するものであることが示されるだろう。

(1) 時間の間隔化

従来のデリダの倫理的、神学的解釈を退けるヘグルンドの『ラディカル無神論』は、ある時間概念をその基礎とする。実際にも本書は、時間論にその第一章を割き、後続する章はいずれもその展開と見ることができる。本書を理解するには、この時間概念を押さえることが肝要である。

第一章において、まずヘグルンドは、デリダの時間概念が哲学的な難問を解決することを示す。難問とは、現在を点として考えれば現在の自己同一性が確保されるが、しかし次の現在に道を譲ることができず、時間の継起を説明できないというものだ（32）。これに対しデリダは、「時間の極小の瞬間さえもはじめから分割されて」おり、「過去を未来から隔てて」いると考える（35）。こうして過去から未来への継起、つまり時間の間隔化の概念が得られる（38）。

この時間の間隔化は、カントとデリダの時間論を比較するなかで詳述される。カントは時間を感性の形式にとどめつつ、時間を免れて同一であり続ける理念（魂の不死など）を論じているが、他方でデリダは、理念の自己同一性をも時間の間隔化によって退けるのである（60）。とりわけ可死性の概念は重要である。この概念は伝統的にネガティブなものとされてきた。しかし、時間の間隔化のうちでは、あらゆるものが自己自身のうちにとどまることができないため、可死性の概念は生の好機と死の脅威を同時に開くもの、つまり望ましいものでもあり同時に望ましくないものでもあることになる。反対に、一般に望ましいものとされてきた不死性こそは、死すべき生の時間を無効にするもっとも望ましくないものなのである（64）。時間の間隔化によって、生は死に、善は悪に、平和は暴力に開かれる（85）。それ自体として善い理念も、悪しき理念に転じうるのである。

これと同じ形の議論によって、第三章ではレヴィナスが論じられる。カントの時間を免れた理念と同様、レヴィナスも歴史の彼方に絶対的他者を想定し（168）、この他者との平和で倫理的な関係性を論じる。しかし、他者が歴史の彼方で自己に対して絶対的に同一的であるならば、それは閉じた全体性の理念であることになり（166）、倫理的関係性を形成できないどころか、

いかなる他の他者との関係性ももちえないことになる（168）。したがって、絶対的平和の理念は絶対的暴力の理念なのである（163）。反対に、時間的間隔化はなんであれ関係性が成り立つために不可欠である（169）。しかし、時間の到来に曝されることで、出会う他者が善き他者か悪しき他者か、未来においてどのような他者に変質するかは決定不可能になるので（170, 174）、この関係性の開け自体は倫理的ではありえない。倫理的な関係性にしろ、暴力的な関係性にしろ、あらゆる他者との関係性は前倫理的な暴力、つまり時間の間隔化によって開かれるからである（164）。デリダをレヴィナスに引きつけて読もうとする従来の解釈はいずれも、倫理に先行するこの暴力つまり時間の間隔化と、これが善き平和な他者を悪しき暴力的な他者に変質させうることを看過していたとヘグルンドは指摘する。こうして従来の倫理的解釈が退けられるのである。

以後の章でも、ヘグルンドがデリダに対する神学的解釈を取り上げるさいには、やはりこうした議論が敷衍される。時間の継起や間隔化は、予見不可能な時間、未来の到来へとパラフレーズされていくが、これが時間の外部に想定された理念にまで及びそれを変質させていく点は変わらない。曰く、メシア的なものという宗教的観念は伝統的に、永遠不朽の＝無時間的な（timeless）約束とされるが、他方デリダはメシア的なものを、永遠不朽＝無時間性の理念を切り崩す未来の到来とする（257）、などである。

以上が、ヘグルンドの議論の要諦を、いわば彼に付き添う形でまとめたものである。さて、「デリダのなかに〔このような〕ラディカル無神論の論理に回収できない箇所を見いだすこと」は、たとえラディカル無神論とは「まったく異なる論理」（24）を提示するまでに至らなかったとしても、彼の議論を今度は外的な視点から、つまりデリダと区別する形で捉えることには貢献するだろう。

そこで次のような問いが立つ、すなわち、デリダは他性を過去から未来への時間経過、未来の予測不可能性として論じていたのか否か。まずはデリダの論じる不可能なもの、たとえば贈与が、そもそも過去・現在・未来のいずれの時間とも異質なものであったことを、『時間を与える』を参照して確認し、そこから帰結するデリダとヘグルンドの差異を、（i）前未来形・未来完了時制と（ii）「もしそうしたものがあるとすれば（s'il y en a）」という仮言的言辞、の二つの論点に即して示そう。

（2）現在＝現前化不可能なもの

デリダによれば、負債が贈与を無化する以上、贈与が行われるためには「受贈者が返さず、…債務を履行せず、…負債を負わないのでなければならない」が、「 この「ねばならない」、これがすでに義務の印である。…つまり、受贈者はまさしく返さないということの義務を自らに負う。彼は、義務を負わないという義務を負う〔il a le *devoir* de ne pas *devoir*〕」。こうして義務は重層化される。しかし、贈与は贈与として現前し認識された途端に負債関係を生じさせてしまうのだから、こうした義務の重層化が意味するものは、贈与の、現前＝現在からの隔たりである。「極言すれば…贈与は贈与として現れてはならないだろう。… 贈与が贈与でありうる

のは、贈与として現前〔pésent〕しないことによってでしかない」[1]。

現在からの隔たりと述べたが、これは未来においてならば贈与が可能であるということを意味しない。重層化された義務を未来へ向けて順次履行していけばやがて贈与が達成されるわけではない。このような義務が意味するのは、未来に贈与を行わねばならないという負債そのものがつねにすでに贈与を無化してしまうという事態である。したがって、未来のその都度の現在＝現前から贈与は逸脱し続ける。未来のあらゆる現在においても、贈与はつねにすでに取り逃されていたことになるだろう。

(i) 前未来形・未来完了時制

そしてこの「〜だったことになるだろう」という前未来形ないし未来完了時制は、デリダの論じる無条件的なものが、未来のいかなる時点の現在においても現前しえないことの謂いである。未来におけるいかなる現前化の試みをもあらかじめ挫くように、先んじて贈与は現前化を拒むのである。

しかし、奇妙なことにヘグルンドは、たとえば贈与と同じく不可能なものである無条件的な歓待について、ひとがつねにそれを行っていると（現在時制で）述べる。いかなる他者と出会うか予測不可能な時間経過では、無条件的なものが条件的なものに変質するのと同時に、条件的なものもまた無条件的なものに変質するというのである。「先取り不可能なものへの曝され…。…「歓待」が無条件的であるのは…ひとは暴力的な訪れを必然的に被りうるからである。このうえなく条件を課すような歓待であっても、当の歓待を崩壊させうるものに対して無条件に歓待している〔is unconditionally hospitable〕のだ」(200)。

無条件的なものが保っていたはずの現在からの隔たりが、現在と未来の隔たりのうちに回収されている。未来の予測不可能性さえもち出せば、条件的なものですら実は無条件的なものなの「である（is)」、と現在時制で断定されるのである。

あらゆる現在＝現前から隔たるゆえに不可能であることを、過去と未来の隔たりにおいては起こりうる可能なことへと変換し、また現在から異質であったはずの他性の概念を、過去や未来という現在と地続きの位相に移し変えるヘグルンドの手法は、『マルクスの亡霊たち』読解を巡っても行われる。不可能なものと現在との隔たりは、この著作のなかでは、亡霊の出現という「反時代性、もしくは錯時性」[2]の、「時間の関節が外れてしまった（the time is out of joint)」事態として論じられるが、ヘグルンドはこれをふたたび過去と未来のあいだではつねに起こっている事態と見なすのである。「亡霊の形象…は、もはやないもの、ないしいまだないものとの関係をしるしづける。また、時間――過去と未来のあいだで関節が外れていること――は極小の瞬間にとってさえも条件となるのだから、亡霊性は生起するすべてのものにおいて作動している〔is at work〕」(159)。

亡霊の出現によって時間の関節が外されることは、通常の時間経過である過去と未来の隔た

---

[1] Jacques Derrida, *Donner le temps*, Galilée, 1991, pp. 26-7.

[2] Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, Galilée, 1993, p. 52：ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳、藤原書店、2007 年、67 頁。

りと同義であるはずがない。それは、過去から未来への時間軸におけるいずれの時点での現在にも異質な、不可能ごとなのである。デリダはこのことを、亡霊からの眼差しの絶対的先行性、非対称性、錯時性、さらには初めての出現以前にさえ亡霊がそこにいる逆説として論じているが[3]、これもまた前未来形・未来完了時制に置き換えることができる。つまり、亡霊はつねにすでに現前に先立っていたことになるだろう、ということだ。しかしこれは、過去と未来のあいだでつねに作動していることとはまったく別物なのである。

前未来形・未来完了時制によって語られる、過去・現在・未来のいずれにも異質なデリダの他性を未来の予測不可能性に変換するヘグルンドは結果として、本書全体にわたり時間論を展開しながらも前未来形・未来完了時制についてはまったく論じることができず、さらに、この時制を多用してレヴィナスを論じたデリダの論考（「この作品の、この瞬間に、我ここに」）を、一度も言及せずに黙殺せざるをえないのである。しかし、この論考でははっきりと、現在＝現前と異質であるのみならず、時間経過とさえも異質な他性への応答が前未来形を用いて問題にされていた。「一切の現在以前の通過、一切の現前的瞬間以前の通過…」。「一つの瞬間から他の瞬間へと移るとき、瞬間そのものはもはや同じではない。しかしそれは…時間が経った…ということに、また今はいまやもう同じではないということに起因するのでもない。それは何よりも他のこと〔chose〕、〈他なるもの〉としての事象〔chose〕に起因するのだ」。「応答可能性とは…決して現在的になってしまうことのない過去としての他なるものに責任をもつことである」。このような他者である「彼は義務づけてしまっているだろう〔il aura obligé〕」[4]。

（ii）仮言的言辞「もしそうしたものがあるとすれば（s'il y en a）」

ところで、現前しえないものを論じるためにデリダが用いる方法として、前未来形・未来完了時制の他に、「もしそうしたものがあるとすれば（s'il y en a）」という仮言的言辞がある。

ヘグルンドは、ひとは条件付きの歓待のさなかにも無条件的な歓待を行っていると述べていた。しかしデリダが論じるのはこれと異なり、仮に無条件的な歓待があるとすればそれは何であってはならないか、という問題である。無条件的なものが何ではないかを検討すること、これは無条件的なものと条件つきのものとの差異づけであり、両者を「分ける」という意味での批判（critic ＜ ギリシア語 *krinein*）である。ひとが条件付きの歓待と無条件的な歓待とを同時に行っているというヘグルンドの主張は、こうした区別づけ＝批判を不可能にするものであり、この意味での批判的議論とは実は言い難い（ラディカル無神論のその好戦的な外見に反して）。

ここから、両者の形而上学に対する姿勢の違いも明らかになる。デリダはある箇所で、決断の瞬間は狂気である、と述べている[5]。決断のうちには当然、無条件的なものと条件付きのもの

---

[3] Jacques Derrida, *Spectres de Marx*, Galilée, 1993, p. 27, 259：ジャック・デリダ『マルクスの亡霊たち』増田一夫訳、藤原書店、2007 年、30-1、335 頁。

[4] Jacques Derrida, *Psyché, Inventions de l'autre (tome 1)*, Galilée, 1987, pp. 173-4, 159：ジャック・デリダ『プシュケー 他なるものの発明 I 』、藤本一勇訳、岩波書店、2014 年、232-3、210 頁。

[5] しかしこの言葉は、デリダ自身のものか、キルケゴールからの引用か、判然としない。これについては以下を参照。Geoffrey Bennington, ‘A Moment of Madness: Derrida's Kierkegaard,’ *Oxford Literary Review*, 33, 1, 2011, pp. 103-127.

を分けることも含まれる、つまりあの仮言的言説「もし〜〔無条件的なもの〕があるとすれば、〜〔条件付きのもの〕でないのでなければならない」も含まれる。言い換えれば、デリダがこの仮言的言説を用いるその都度、彼は狂気のなかで決断をしているのである。このような狂気の仮言的決断は、二項対立が入れ替わる論理的矛盾を暴く（ヘグルンド）にとどまらず、その矛盾を積極的に引き受けなければ為されえないことである。デリダが論理的矛盾を引き受けることができるのは、彼がそれを、退けるべき誤謬としてではなく、無条件的なものがテクストに残した痕跡として見なしているからである。実際、痕跡の背後の読解を試みればこそ、「もしそうしたものがあるとすれば」という仮言的言辞も生み出されるのである。デリダ自身が述べるように、現前性が脱構築されてもなお、むしろそれだからこそ依然として、痕跡としての「形而上学のテクストは…まだ読まれうる〔encore lisible〕。そして読まれなくてはならない〔à lire〕」のである[6]。

他方ヘグルンドにとっては、論理的矛盾は論敵が犯した誤りであり、その論駁をとおして彼がラディカル無神論の立場を打ち立てるところの叩き台、良く言っても好敵手だろう。しかし彼は論敵の矛盾をあえて引き受け、それを無条件的なものの痕跡と見立てて、「もしそうしたものがあるならば」という狂気の仮言的決断に向かうことはしない。不可能ごととしての無条件的なものを未来への時間経過によって可能化するヘグルンドの議論の構造からして、それは必要のないことであり、またできないことなのである。

こうして、論理的矛盾を積極的に引き受けるデリダの遂行的矛盾（contradiction performative）の所作を、ヘグルンドが議論の構造上うまく扱えないことが一因となり、本書にパフォーマティヴ概念の議論がまったく見受けられないのみならず、デリダのパフォーマティヴな一連のテクストも読解されないという事態が帰結する。たとえば『弔鐘』はまったく登場せず、『絵葉書』は一度の言及のみで引用もなされず、『散種』からのわずか二回の引用もエクリチュール概念の概括的な説明のためであって、『散種』という書き物ないしエクリチュールそのものは問題にされない。たしかに『割礼告白』は度々引かれ、そこで時間的有限性としての死ならば論じられるが、それならばブランショの「私の死の瞬間」を読解する『滞留』はどうかといえば、三つの注で引かれるのみで、本文中では一度も論じられない。明らかにこれは『滞留』が死を「文学的虚構の可能性」[7]に結びつけるからである。『ラディカル無神論』全体にわたり死が主題となっているにもかかわらず、死の虚構性も、仮言的言辞も問題とされない原因は、上記のヘグルンドの議論の構造が遂行的矛盾を排除するということ以外には考えられないのである。

上記のように、前未来形・未来完了時制と仮言的言辞の二点にわたってデリダとヘグルンドを比較することによって、本書の議論の構造はいっそう明確になっただろう。

---

[6] Jacques Derrida, *Marges − de la philosophie*, Minuit, 1972, p. 25：ジャック・デリダ『哲学の余白』上巻、高橋允昭・藤本一勇訳、法政大学出版局、2007 年、70 頁。

[7] Jacques Derrida, *Demeure − Maurice Blanchot*, Galilée, 1998, p. 94：『滞留』湯浅博雄・郷原佳以・坂本浩也・西山達也・安原伸一朗訳、未來社、2000 年、109 頁。